

菊川町埋蔵文化財報告書 第13集

豆尻II遺跡発掘調査報告書

1988

静岡県袋井土木事務所
静岡県菊川町教育委員会

例　　言

1. 本書は昭和61年12月1日から昭和61年12月20にかけて実施した静岡県菊川町西方堀田に所在する豆尻Ⅱ遺跡の発掘調査報告書である。
2. 調査を行うに至った原因は、周知の遺跡内において河川改修工事が計画されたためである。調査に要した費用は、静岡県袋井土木事務所が負担した。
3. 発掘調査は、菊川町教育委員会が静岡県袋井土木事務所より委託を請け調査を実施した。
　　調査主体　菊川町教育委員会
4. 本書の執筆は付載を島田冬史（立正大学院生）が分担し、他は水島和弘が行った。
5. 遺物整理および測図・挿図作成は堀内初代の協力を得た。
6. 遺構・遺物写真は木佐森道弘の協力を得、水島が撮影した。
7. 本書の編集は水島があたった。
8. 本調査および本書刊行に関する事務は、菊川町教育委員会社会教育課が行った。
9. 実測図・写真および出土遺物は、菊川町教育委員会が保管している。

目 次

| | |
|-----------------------|----|
| 第1章 調査の経過..... | 1 |
| 第2章 地理的・歴史的環境..... | 5 |
| 第3章 調査の概要..... | 6 |
| まとめ..... | 23 |
| 付載1 豆尻遺跡表採遺物について..... | 25 |

挿図目次

写真図版

| | |
|----------------------|---|
| 第1図 位置図 | 図版第1 表土剥ぎ作業・発掘作業状況 |
| 第2図 グリット配置図 | 図版第2 A地区完掘（東より）、B地区完掘（南より） |
| 第3図 遺跡の位置と周辺の遺跡 | 図版第3 S B-01遺物出土状態・完掘（共に南より） |
| 第4図 全体図 | 図版第4 S B-01内出土土器 |
| 第5図 S B-01実測図 | 図版第5 S K-01遺物出土状態（南より） S K-01完掘（南より） |
| 第6図 S K-01・S B-02実測図 | 図版第6 S B-02完掘（西より） S D-01完掘（西より） |
| 第7図 S K-02実測図 | 図版第7 出土遺物1 |
| 第8図 A地区出土遺物1 | 図版第8 出土遺物2 |
| 第9図 A地区出土遺物2 | 図版第9 出土遺物3 |
| 第10図 A地区出土遺物3 | 図版第10 出土遺物4 |
| 第11図 B地区出土遺物1 | 図版第11 出土遺物5 |
| 第12図 B地区出土遺物2 | 図版第12 出土遺物6 |
| 第13図 B地区出土遺物3 | 図版第13 出土遺物7 |
| 第14図 B地区出土遺物4 | 図版第14 出土遺物8 |
| 第15図 B地区出土遺物5 | 図版第15 表採遺物 |
| 第16図 B地区出土遺物6 | |
| 第17図 表採遺物実測図 | |

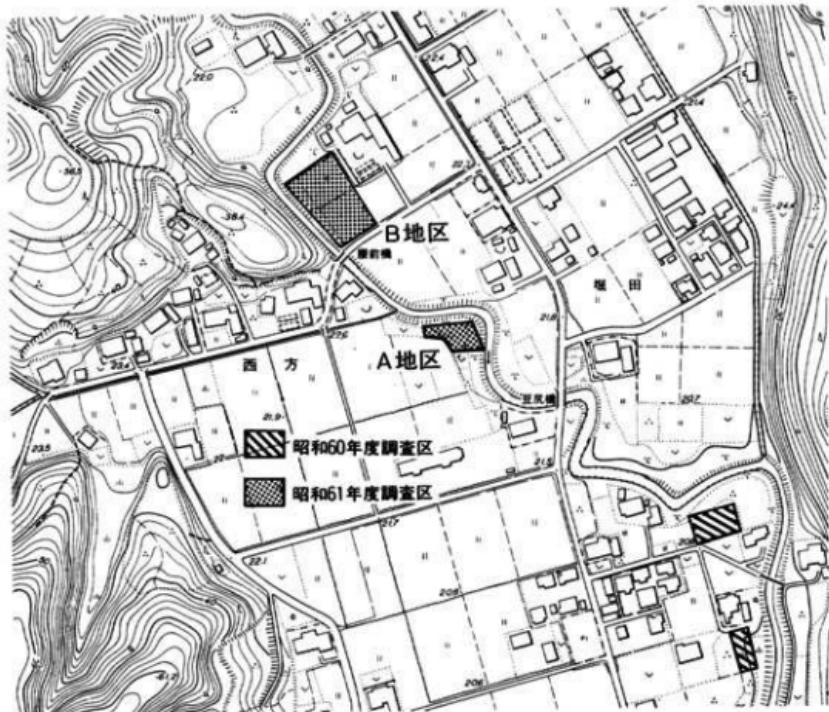
第1章 調査の経過

調査に至る経過

菊川町には、町の中心を流れる菊川をはじめ上小笠川・牛湊川・西方川などの河川がある。これらの河川は、大雨のたびに洪水を起こし住民の生活を脅かしてきた。そのため近年大規模な河川改修工事が進められることになった。西方川は、西方・加茂地区を流れる一級河川で、昭和50年代頃から河川改修工事が進められた。

西方川流域には、白岩遺跡・白岩下遺跡・豆尻遺跡など縄文時代から室町時代に至る数多くの遺跡が所在している。中でも白岩遺跡をはじめ弥生時代の遺跡が多く分布しておりこの地域が稲作に適していた地域であったことがうかがえる。しかし遺跡の分布する周辺では、急激な工業化に伴い開発が進められ、文化財の取り扱いについて問題が生じている。

西方川河川改修工事の計画内には、菊川町遺跡地図に記載されている豆尻遺跡が分布している。そのため、この遺跡が河川改修事業によって破壊を受けることが予想されたため、この問



第1図 位 置 図

題の取り扱いについて静岡県袋井土木事務所をはじめ静岡県教育委員会文化課、菊川町教育委員会の各機関で協議を行った。その結果、工事着工前に現地調査を行うことになった。

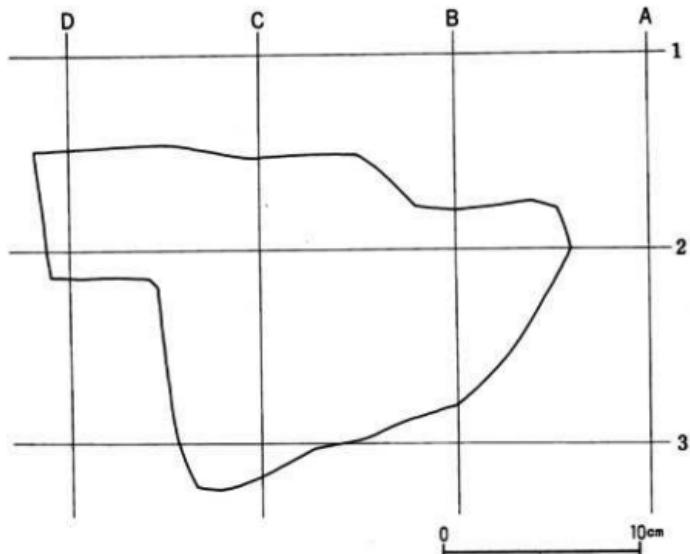
現地調査は、県教育委員会の指導のもとで町教育委員会が主体となり実施した。

調査の方法及び経過

方 法（第1・2図）

調査は、河川改修工事計画で掘削する部分を中心に行い河川の下流をA地区、上流をB地区とし二地区に分けて行った。調査対象は両地区とも300m²である。調査方法は、調査区内を1m方眼のグリットに区切りこのグリットを基準に発掘調査を実施した。各グリットは、東西方向を1～5として、南北方向を北よりA～Dとして設定した。そしてグリット名は、アルファベットと数字の組合せにより呼ぶこととし、北東の交点をそのグリット名に代表させた。基軸の方位は、A地区ではN—0°40'37"—W、B地区ではN—34°39'30"—Wである。

現地での作成図は基本的に縮尺20分の1を基本として、必要に応じて縮尺10分の1の図を作成した。写真撮影には35mm×判カメラと6×7判カメラを用いて、白黒フィルム及びカラーリバーサルフィルムを使用した。



第2図 グリット配置図

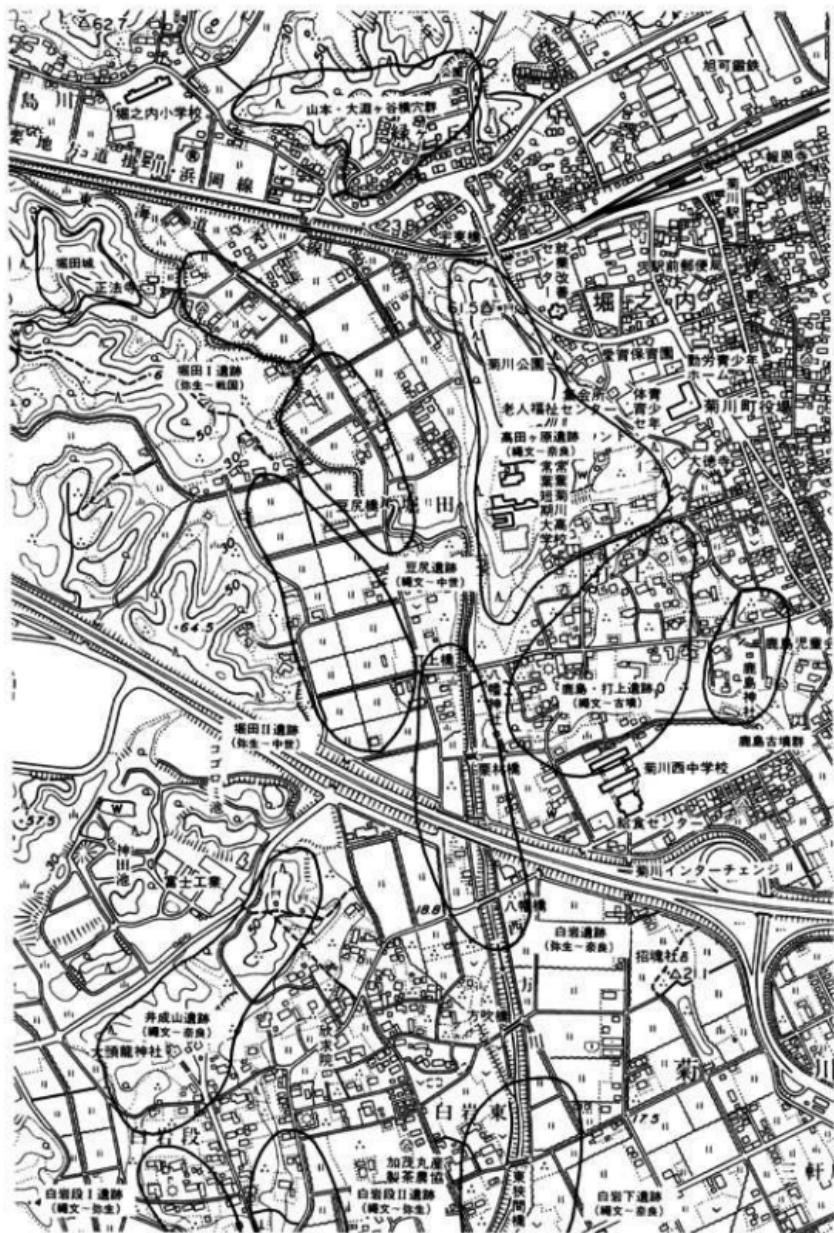
経 過

- 昭和61年12月1日 発掘器材を搬入し現地調査を開始する。
- 2日 B地区内の南側より人力による荒掘り作業を行う。
- 3日 土壌（SK-02）1ヶ所、住居跡（SB-02）1軒を検出する。
- 4日 午前中排水、午後SB-02の精査・掘削・写真撮影を行い完掘する。
- 5日 大溝（SD-01）の精査・掘削を行う。
- 6日 B地区内の遺構の掘削を完了したのち完掘写真撮影を行う。その後全体図の作成を行う。B地区的調査と平行してA地区的調査を開始する。
- 8日 B地区内の図面作成を終了する。A地区内の荒掘り作業を行う。
- 9日 終日A地区内の荒掘り作業を行う。
- 10日 A地区内の精査を行うその結果、住居跡（SB-01）を検出する。
- 11日 SB-01の掘削作業を行う。
- 12日 調査区内西側の精査を行い柱穴を検出する。
- 16日 調査区の中央北で土壌（SK-01）を検出する。土壌が調査区外に延びているため北側の拡張を行う。
- 17日 遺構の掘削作業を行う。
- 20日 "
- 21日 SB-01の遺物出土状態の写真撮影を行う。
- 22日 SB-01内の遺物を計測し取り上げを行う。SK-01の完掘写真撮影を行う。
- 23日 SB-01内の精査及びSK-01の計測を行う。
- 24日 SB-01の完掘写真撮影・計測を行う。
- 25日 A地区的全景の写真撮影を行い、その後平面図を縮尺20分の1で計測し、A地区的調査を完掘し、B地区的調査を完了する。
- 26日 B地区的土器溜を完掘し、B地区的調査を完了する。
発掘器材の撤収を行い、現地調査を終了する。

調 査 体 制

調査指導機関 静岡県教育委員会文化課

調査実施機関 静岡県菊川町教育委員会 教育長 佐野紋一
社会教育課 課長横山守孝
文化振興係 係長山内均
文化財担当水島和弘（調査担当者）



第3図 遺跡の位置と周辺の遺跡

現地調査

調査補助員 木佐森道弘・石川方巳（町文化財専門審議委員）
作業員 岡本喜一 戸塚一雄 成瀬常松 高岡三郎 成瀬ふで子 野中保子
吉野かつ子 岡本ひさみ 織野さかえ 夏目りつ子 堀木やす子
三ツ井しの 福島さと子 伊藤初恵 堀内初代

資料整理

整理員 野中安男（日本大学生） 竹内夏子 福島さと子 三ツ井しの
堀内初代 福島瑞枝 横山玲子 宮城ひとみ

第2章 地理的・歴史的環境（第3図）

当遺跡は、東海道線菊川駅より約1.2kmほど西の菊川町西方地区堀田地内の、西方川により形成された沖積平野に所在する。この沖積平野は、東側の高田ヶ原丘陵、西側の掛川丘陵に挟まれた狭隘な平野である。

西方川は、西方最北部の掛川市境付近より発し、西方地区の公文名・島川を南流し堀田で大きく蛇行する。川は、豆尻橋付近で流れを変え沖積平野を横断する。さらに高田ヶ原丘陵の西側を流れ加茂地区を貫き月岡付近で菊川と合流する一級河川である。この川の本流は、古くは掛川市満水に通じていたことが地形から考えられている。

西方川周辺の丘陵地は、標高が60m前後と比較的低く、丘陵縁辺部には数段の河岸段丘が見られる。河岸段丘は、菊川町内では多い地形で約350ヶ所確認されている。この段丘は、規模や高さなどの特徴から五段階にわけられており、西方周辺の丘陵は、第5段丘に位置付けられている。また、段丘上には、数mの礫層が堆積している。礫は不ぞろいな亜円礫又は、亜角礫からなり古菊川の川底に堆積したものと考えられている。丘陵と段丘の基盤を造る地層の殆どは、新第三紀鮮新世の掛川層群から成るが、一部公文名南部から島川にかけ、新第三紀中新世に堆積した相良層群の最上部層である満水層が分布する。また、堀田から加茂にかけ掛川層群の白岩凝灰岩層が帶状に分布している。この様に広く分布する新第三紀の地層は、固結度が弱く侵食されやすいため開析が進み、侵食谷が樹枝状に発達している。そしてこれらの谷の深部には溜池が造られ、谷底は埋積谷、沖積平野となっている。本遺跡付近での沖積層の厚さは12.3mに達する。

菊川町遺跡地図（1982年）によって、西方川周辺の遺跡分布状況を見ると、河川近くに集中し立地している。各時代ごと概観して見よう。

縄文時代の遺跡は、立地する地形によって大きく2つに分られる。第一に比較的標高の高い丘陵に分布するもので、高田ヶ原丘陵を中心とする高田ヶ原遺跡・鹿島・打上遺跡と、加茂の丘陵上の井成山遺跡・白岩段Ⅰ・Ⅱがある。第二に沖積地に立地するもので白岩下遺跡・白岩遺跡・豆尻遺跡がある。前者の遺跡は例示した以外に多く認められ、当時の生活の場が丘陵を中心に行われていたことが明らかである。しかし、この地域では後者の遺跡も多く見られ注目

される。遺跡の時期については、白岩下遺跡で前期の遺物が出土しており、この地域では今のところもっとも古い例である。他の遺跡は、中期の時期である。しかし未調査の遺跡が多く性格を把握するには至っていない。

弥生時代の遺跡は、西方川の堆積物によって形成された沖積平野に広く分布している。白岩遺跡は、この時期の代表的な遺跡であり、遠州地方中期後葉の標式遺跡として白岩式土器と命名されている。白岩遺跡は数回の調査で、農具・建築材・機織具などの木製品が多く出土している。また、遺跡の規模も広範囲であり西方川流域の中核的な役割をもつ集落であったと考えられる。後期には、高田ケ原遺跡など段丘上にも遺跡が見られ古墳時代前期ごろまで同じ分布を示している。古墳時代になると前期ごろまでは、段丘上にも遺跡が分布するがそれ以降丘陵上に集落が作られることはほとんどないようである。今回調査した豆尻Ⅱ遺跡は、沖積平野する古墳時代後期の遺跡である。段丘上は、古墳が築造され墓域となる。特に高田ケ原丘陵には、前方後円墳の大徳寺古墳をはじめ古手の古墳が數基みられる。後期になると古墳は小規模になり群を構成するようになる。菊川流域では横穴が盛んに造られこの流域の特徴となっている。

西方川流域には、高田ケ原丘陵から北の大淵ヶ谷にかけ約100基程ありそれらは群を構成している。群は、大淵ヶ谷横穴群・篠ヶ谷横穴群・西宮浦横穴群・山本横穴群の4群からなる。これらの横穴は、6世紀中葉から築造され8世紀には衰退する。

奈良時代以降遺跡の分布は古墳時代とあまり変化が認められない。しかし調査例なく遺跡の性格が判しているものはない。律令下では菊川町はただ遠江国城飼郡に含まれているが、郡衙の位置等不明な点が多い。豆尻Ⅱ遺跡からは、この時期の遺物や遺構が出土しており興味ある資料を提供している。

第3章 調査の概要

層位

今回の調査によって以下4層を識別することができた。

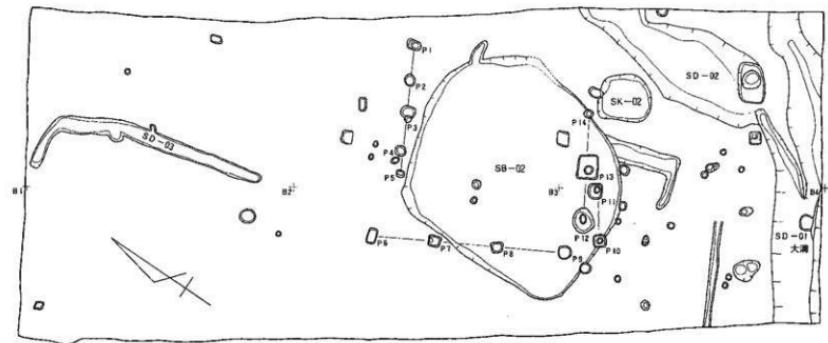
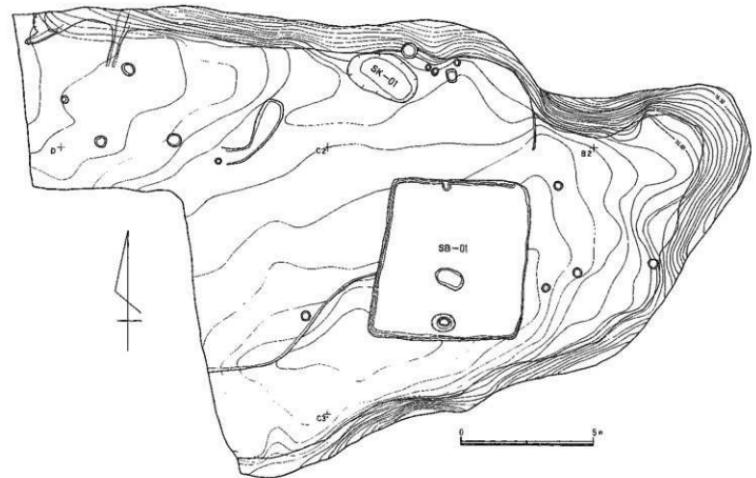
I層 = 表土

II層 = 暗灰褐色砂質土層

III層 = 茶褐色粘質土層

IV層 = 黄褐色粘質土層

I層は耕作によって搅乱されているがII層と同位層である。II層は、河川の氾濫で堆積した土層である。III層は遺物包含層である。厚さは、20~30cmと薄い。IV層は管鉄が多く硬くしまっている基盤層である。遺構はIII層より掘り込まれている。B地区はA地区より堆積が薄く、II層は検出されなかった。

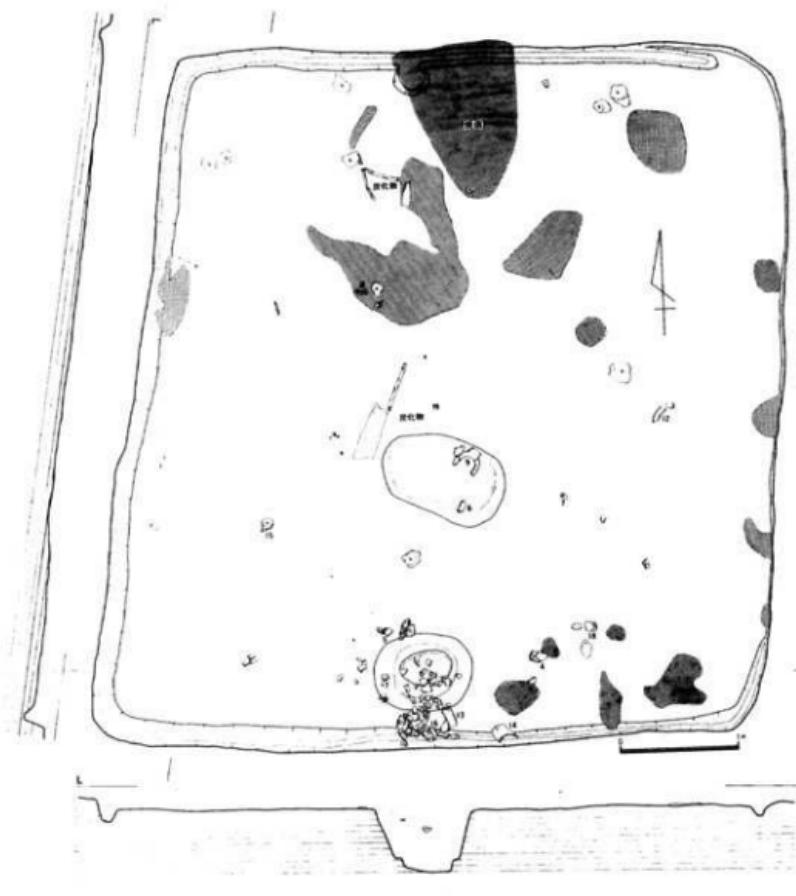


第4図 全体図

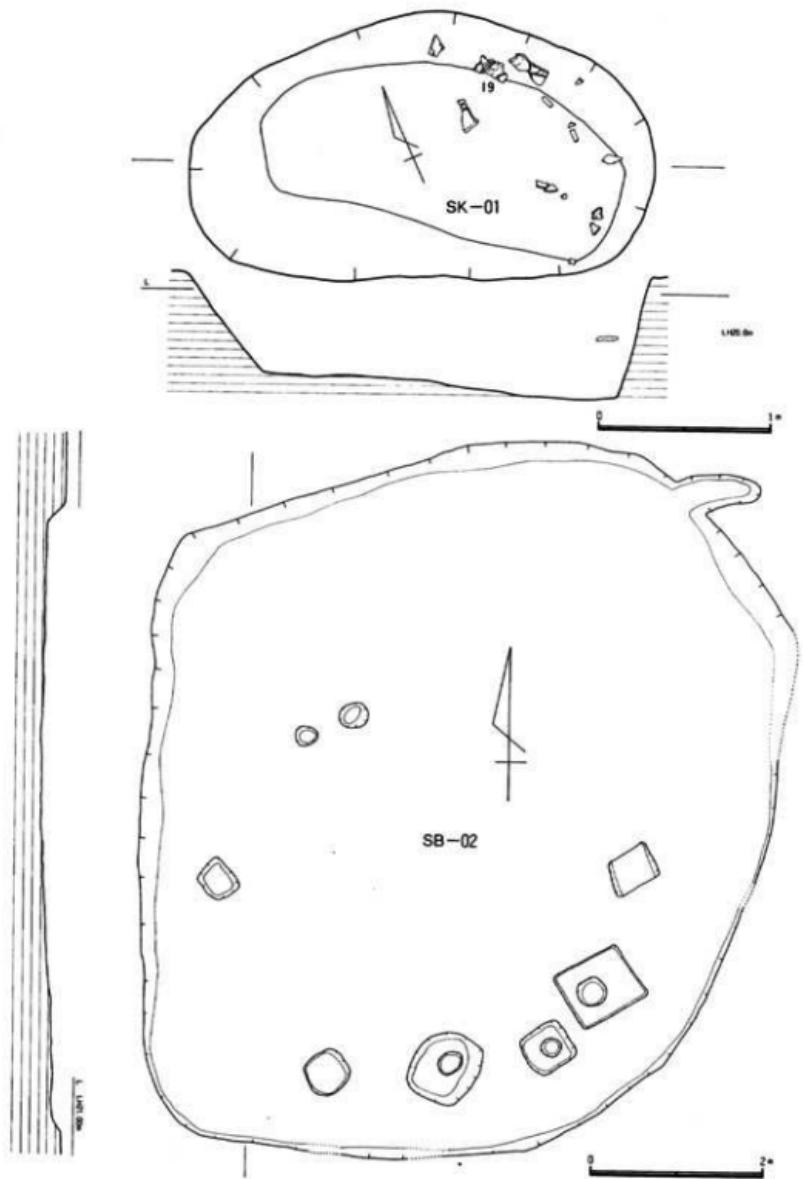
遺構(第4図)

遺構は両地区より住居跡(SB)2ヶ所、土壤(SK)1ヶ所、溝(SD)3ヶ所、小穴が検出された。A地区から各遺構ごとに記述する。

A地区 SB-01(第5図) B2区内に位置する。平面形は方形で、東西5.5m×南北6.0mの規模をもつ。壁面の高さは15cmである。覆土は茶褐色であり炭化物や焼土ブロックを含んでいる。柱穴は、検出されなかった。壁溝は幅10~20cm、床面からの深さは10cmで、東壁側



第5図 SB-01実測図



第6図 SK-01、SB-02実測図

以外は巡っている。かまどと思われる焼土は北壁側中央部に位置する。床面は、全面に薄く焼けており、南北壁側では顕著に焼け赤色になっている。また、焼土内から炭化した建築材が認められた。このことから火災に遭遇していると考えられる。

出土遺物は須恵器（1）と土師器（2～18）が出土している。1・2・12の遺物は、床面より検出している。

SK-01（第6図） B1区内SB-01の北側に位置する。平面形は楕円形で長軸2.7m×短軸1.55m、深さ84.5cmの規模をもつ。底面は平である。覆土は2層からなり、上層から黄褐色、茶褐色である。上層は粘土ブロックを含んでいる。

出土遺物は土師器（19）の瓶が出土している。

小穴（第4図） 小穴は全部で15ヶ所検出された。SB-01・SK-01の東側、C1区内にまとまって位置する。小穴の並びは不規則で建物跡となるか明確でない。規模は、直径約30cm前後の円形で深さ10～20cmを測る。

出土遺物は認められなかった。

B地区 SB-02（第6図） 調査区中央に位置する。平面形は、東壁面の一部が削平されているが隅丸方形である。規模は、長軸4.0m×短軸3.6mを測る。壁面までの高さは20cmである。覆土は暗茶褐色である。ピットは7ヶ所認められたがSB-02の柱穴かどうかは定かでない。

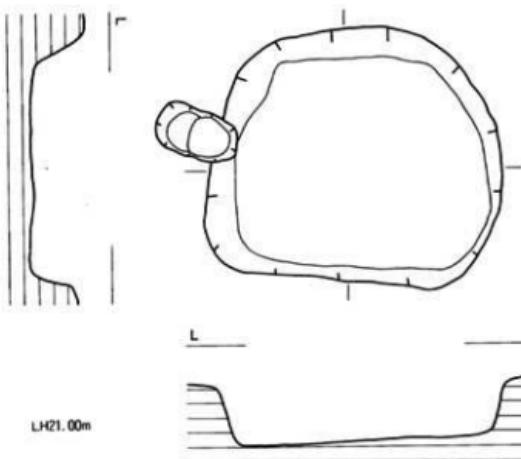
出土遺物は須恵器（146～147）・陶器（151）・土師器（148～150）である。

SK-02（第7図） A3区

内に位置する。平面形は不整形で、長軸1.0m×短軸0.8m、深さ30cmの規模をもつ。覆土は茶褐色である。

出土遺物は覆土内より土師器（152・153）が出土している。また、底面より木製品（漆皿）が1点出土している。以上のことからこの遺構の時期は中世と推測される。

SD-01（第4図） 調査区内の南に位置する。溝は東西方向に延び、東から西に向かって低くなっている。規模は、調査区外に延びているため明らかでない。深さは、検出面より1mを測る。覆土は3層からなり、上層から茶褐色、明茶褐色、青



第7図 SK-02実測図

色粘質土である。

遺物は、明茶褐色層と青色粘質土層の境より灰釉陶器が出土している。今回の調査で一番規模の大きい溝で、遺物や覆土より中世のものと判断される。

SD-02（第4図） A3区内に位置する。溝は南北方向に延びて、B4杭周辺でSD-01に合流する。規模は、幅2.0m、深さ30cmを測る。

遺物は、覆土内より土師器が出土している。

SD-03（第4図） A1区内に位置する。溝は南北に延びているが、北で「く」の字に折れる。規模は、長さ4.4m、幅50cmを測る。深さは10cmと浅く呈する。覆土はⅢ層からなる。遺物は出土しなかった。

小穴（第4図） 小穴は全部で41ヶ所検出され、SD-02付近に集中している。これらは、位置関係よりP1～5、P6～9、P10・11、P12～14の各並びが想定されるが特に、まとまりのあるものは把握できなかった。各穴の覆土は、茶褐色である。

出土遺物は、P12より灰釉陶器（168）の碗底部、P14で土師器（169）が出土している。他の小穴からは特に遺物は認められなかった。各小穴の時期については、不明である。

遺 物

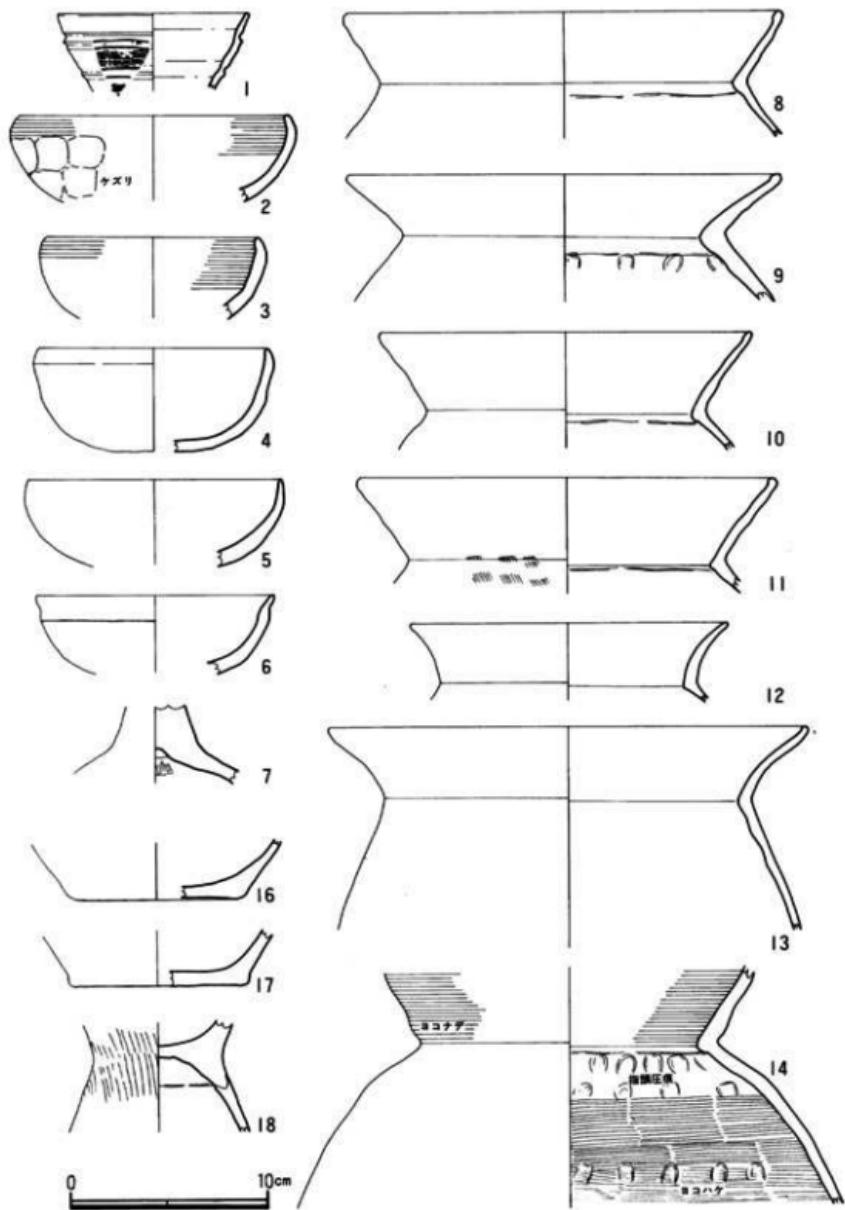
出土遺物は古墳時代～中世のものである。木製品（中世）が1点出土している以外は、全て土器である。土器は須恵器、土師器、灰釉陶器、陶器があり、その大部分の資料は土師器である。図示した資料は破片が多く、特に造構内の出土遺物については図示可能なものは全て載せている。では、A地区より各造構ごとに説明していくことにする。

A地区（第8～10図）

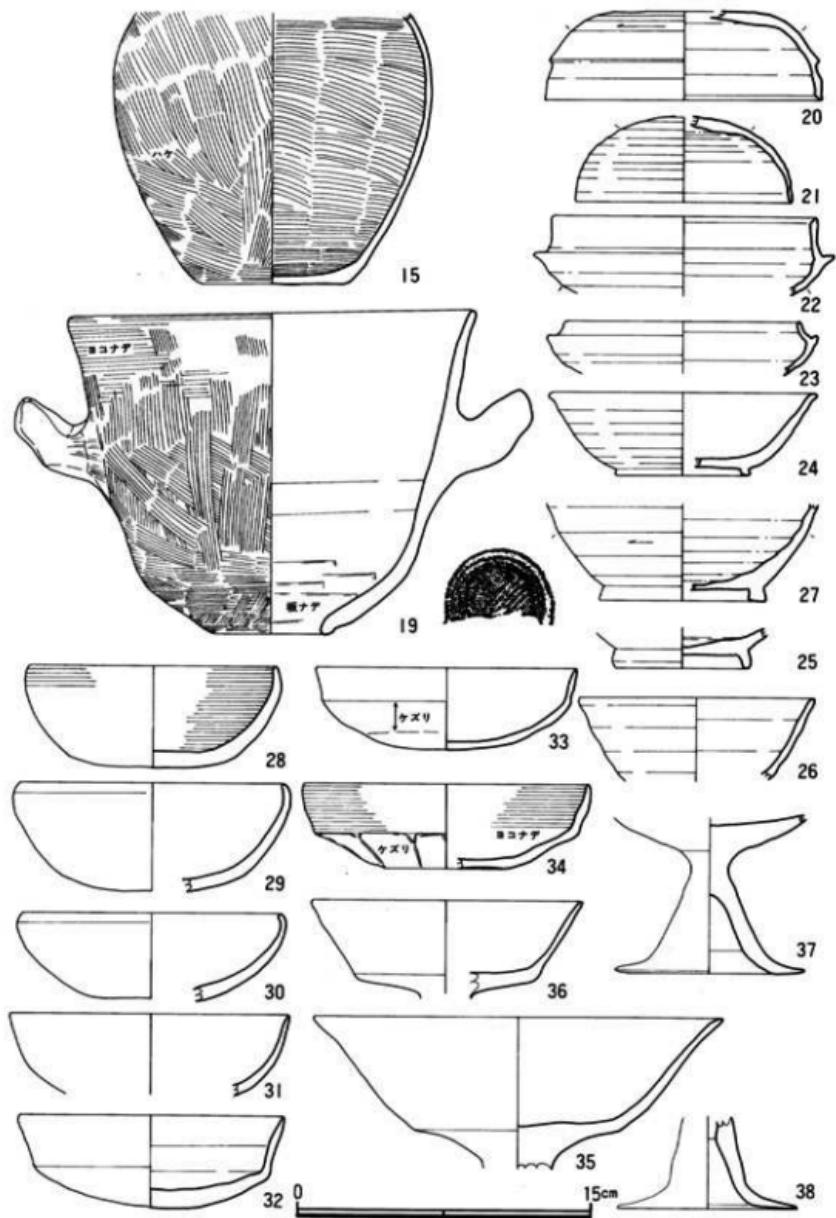
SB-1（1～18） 須恵器1、土師器2～18の合計18点が図示できた。1は須恵器甌の口縁部の破片である。2～5は坏身で、口縁部の形態で内湾するもの坏A（2・3）と直立するもの坏B（4・5）がある。6は口縁端部内面を斜に面取りし、外反させる鉢である。7は高坏の脚部である。8～18は甌である。8～13は口縁部の破片で、頭部は強く屈曲させ、口縁部を直線的に外反させ口唇部を丸く肥厚させるもの甌A（8～11）、口縁部を緩やかに外反させ、口唇部を丸くするもの甌B（12）、頭部があまり強く折れず緩やかに外反するもの甌C（13）である。14は口縁部を肥厚するものである。15～17は平底の底部である。18は台付甌の脚部である。いずれも5～6世紀の古墳時代の土器である。

SK-01（19） 19は土師器の瓶である。口径は20.4cm、器高16.7cmを測りやや小型である。口縁部は外側に開き口唇部はヨコナデ調整され丸い。古墳時代後期の製品である。

その他（20～54） A地区内のC2ポイント周辺はやや低い地形で流路となっている。ここに図示した土器は、流路周辺より出土したもので土器溜となっていた。20～23は須恵器である。20・21は坏蓋で、22・23は坏身である。坏類の年代は20・22がMT15に平行し、21・23はⅢ期後半と考えられ6世紀の製品である。24・25は灰釉陶器である。24は高台が断面方形の角高台

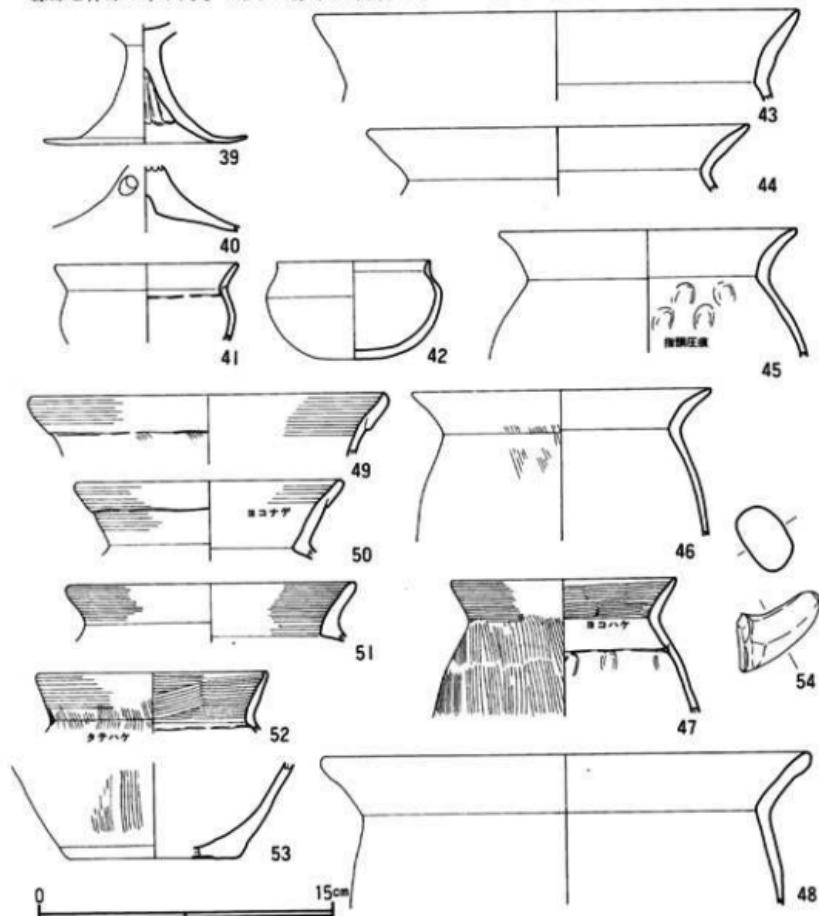


第8図 A地区出土遺物 1



第9図 A地区出土遺物 2

であり黒窯14号窯式の特徴を示す。25は高台が爪形を呈するもので折戸53号窯式であろう。26は山茶腕の口縁部で12~13世紀の製品と思われる。27は高台を有する壺の底部である。高台は方形で外側にやや広がっており、平安時代初頭のものであろう。28~54は土師器である。28~34は壺で口縁部を内済させるもの壺A (28~30) と外側に開くもの壺C (31) がある。また、口縁部と体部の境に稜を明瞭に残し、口縁部を直立させるもの壺D (32~34) がいる。壺D類は口縁部をヨコナデ調整し体部から底部にかけケズリ調整を施している。35~40は高壺の破片である。35・36の壺部は下位で稜をなし直線的に外反し立上がる。37~40は脚部である。脚部はハの字状に開き裾が屈曲して外に開く。40は2方向に孔がある。41・42は鉢である。41は口縁部と体部の巾が同じであり口縁部が外反する。42は口縁部が直立するものである。43~53の



第10図 A地区出土遺物3

11点は壺である。これらは、口縁部の形態によって、口縁部を外反させ口唇部を尖らせるもの（43～47）口縁部を外反させ折返すもの（48～51）口縁部が内湾して立ちあがるもの（52）に分類される。53は底部である。54は瓶の把手である。以上土師器は瓶以外はいずれも古墳時代後期のものである。

B地区（第11～16図）

土器窓（55～143）　土器窓は、工事中に河川の堤地点で発見されたものである。土器窓としたが実際は土壤内の出土遺物である。遺物は、須恵器（55～101）と土師器（102～143）が出土している。

須恵器は、壺蓋、壺身、皿、壺などの器種があり、壺類が多くを占めている。壺蓋は古墳時代からの系譜をひくI類（55）、宝珠つまみを有するII類（56～74）、II類の大型品をIII類（75・76）に分類される。

I類一口径14.6cmで、口縁部が少し外側に開き口唇部を丸く仕上げている。天井部は一部欠損しているが回転ヘラケズリ整形されている。55がこの型式である。

II類は法量やつまみの形状、口縁部の作り方により4つに細分される。

IIa一扁平なつまみがつき、口唇部は下に折り曲げられる。天井部は弧状をなしているものである。56～59がこの型式に含まれる。

IIb比較的高いつまみがつき、天井部の頂部が平らにヘラケズリされる。口唇部はしっかりと折り曲げられるものである。60～69がこの型式である。

IIc一つまみはIIbと変化ないが、天井部から口縁部まで直線的であり扁平である。口唇部は短く内側に折り曲げられる。70～72がこの型式である。

IID-IIeを小型化したもので、つまみは顕著に縮小している。口径は12cm前後である。73・74がこの型式である。

IIe一つまみは、欠損しているが口径18～20cm前後とIIbの大型である。天井部外面には褐色の自然釉が付いている。75・76がこの型式である。

壺身は有台壺身のI類（77～79）と無台壺身のII類（80～95）に大きく分けられる。

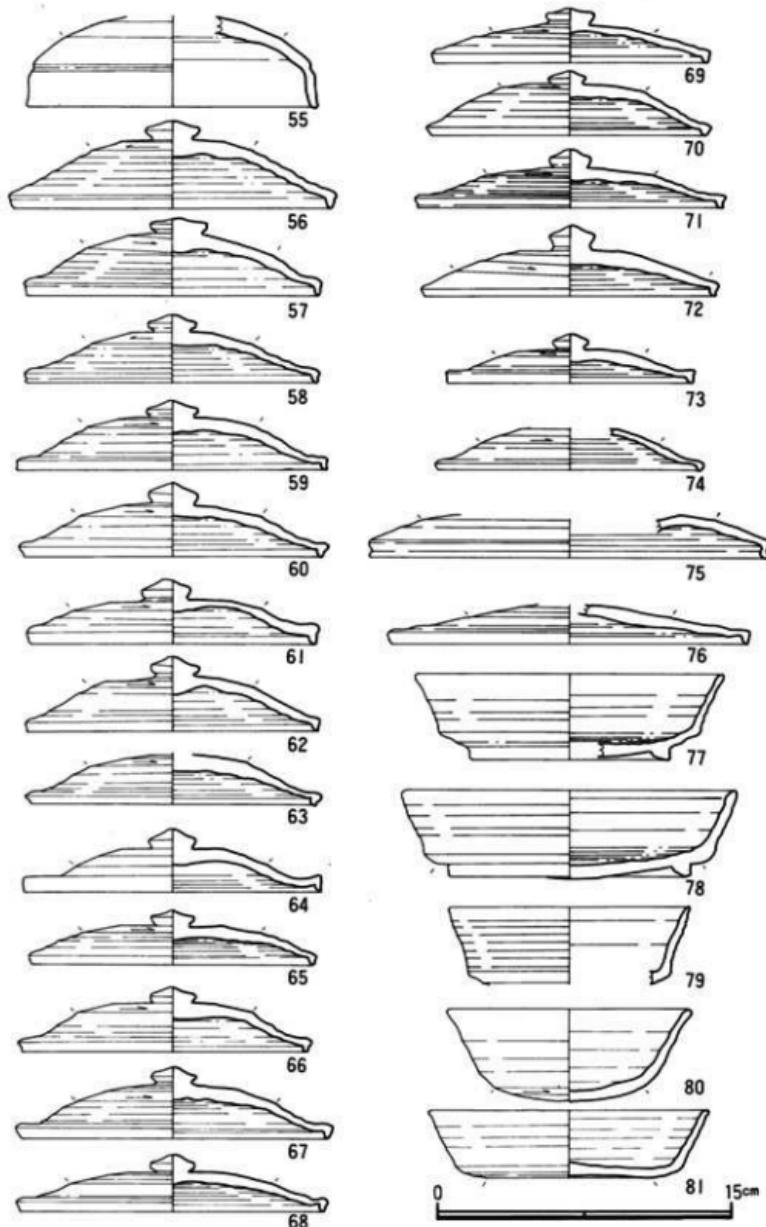
I類一口縁部が直線的に外反し、体部が屈折している。底部は丸底状で、高台は低く扁平に作られる。77～79がこの型式である。

II類は、法量及び底部や口縁部の作り方により5形式に細分される。

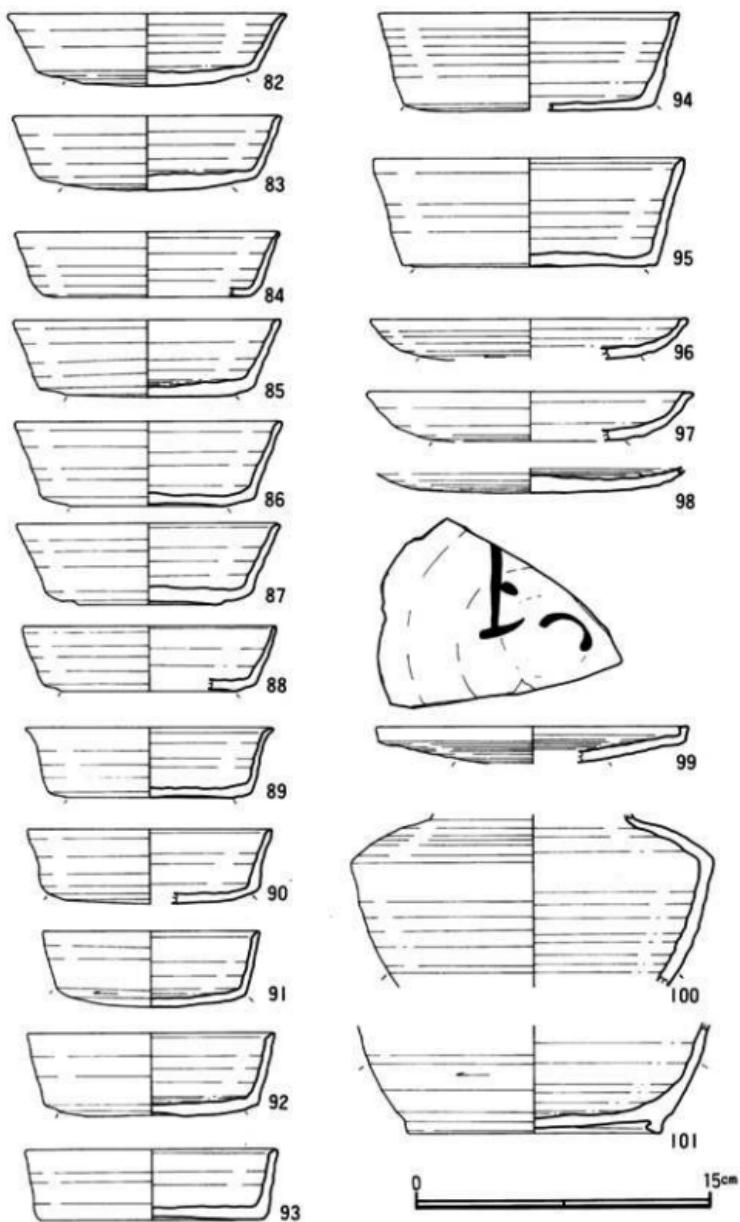
IIa一口径は12.1cmである。全体に半球形をしている。底部はヘラケズリ調整が施され丸底状に作られている。80がこの型式である。

IIb一口径12～14cm、器高3.5cm前後で比較的の口径に対し浅い作りである。口縁部は外側に開き口唇部を丸くする。底部は弱い丸底状で、口縁部と底部の境に稜をなさない。81～84がこの型式である。

IIc一口径11～13.5cm前後で、口縁部と底部の境に稜をもつものである。口縁部は外反し底部は2段底状にヘラケズリ調整され平に作られている。85～91がこの型式である。



第11図 B地区出土遺物 1



第12図 B地区出土遺物 2

II d 一口径12.5cm前後である。口縁部は直線的に立上がり、口唇部を平坦面にしているもので、底部は平らである。92・93がこの型式である。

II e 一口径16cm前後のもので、II d の大型品である。94～95がこの型式である。

96～98は皿である。口径に比して、深さのきわめて浅い皿状のもので、底部はヘラケズリ調整され平らな作りである。口径は16cm前後を測る。96・97は口縁部は丸みをもって立上がり口唇部を少し肥厚させている。98は墨書き土器で底部外面に「上」と書かれている。99は高台の環部で、环蓋 II d に類似するものである。100・101は壺である。100は胴部の破片で肩部の張るものである。101は高台を付した底部の破片である。底はていねいにヘラケズリ調整され平らである。

土師器は壺・皿・鉢・碗・手捏・壺などの器種がある。

壺は高台の有無によって有高台のもの I 壺 (102～107) と無高台のもの II 壺 (108) に分けられる。

I 壺 一口径16cm前後で、全面ていねいなヨコナデ調整が施され丹塗りされている。口縁部は直線的に延びている。体部は底部より直角に折れ深い作りのものである。102～107がこの型式である。

II 壺 一口縁部は丸みをもち立ち上がる。口縁部をヨコナデ調整し体部から底部にかけてケズリ調整されているものである。108がこの型式に属する。

皿は表面全て丹塗りである。これらは形態や製作手法などによって4つに細分される。

A 一口径16～17cm、器高2.7前後を測り、口径に比べ器高が低く扁平な作りのものである。口縁部は強いヨコナデ調整され棱が残り、底部には木葉痕が見られる。109～113がこの型式である。

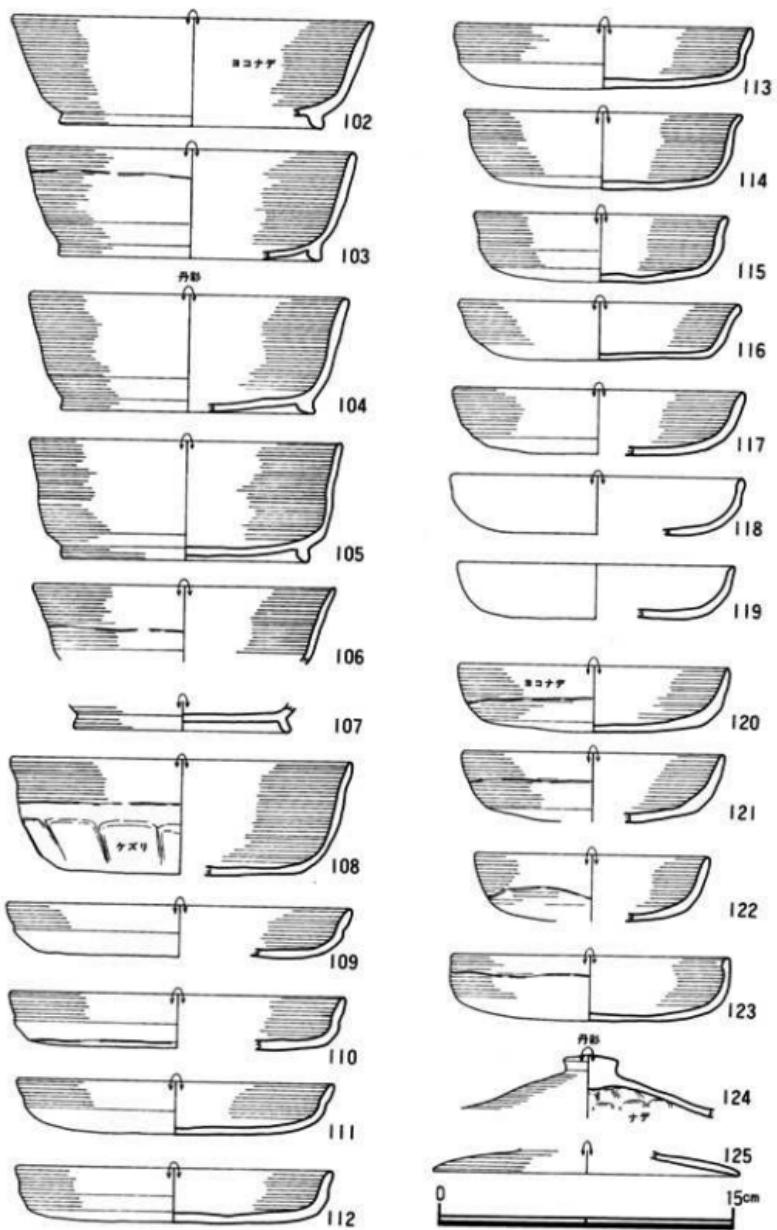
B 一口径12～17cm前後である。口縁部は丸みをもち立ち上がり口縁端部直下を強く外反させる。また全面ヨコナデ調整を施すものである。114～116がこの型式である。

C 一口径14cm、高器3.0cm前後で、口径に比べやや深い作りのものである。口縁部は丸みをもち直立気味に立上がり口唇部を尖らせている。底部は丸みをもつ。117～122がこの型式である。

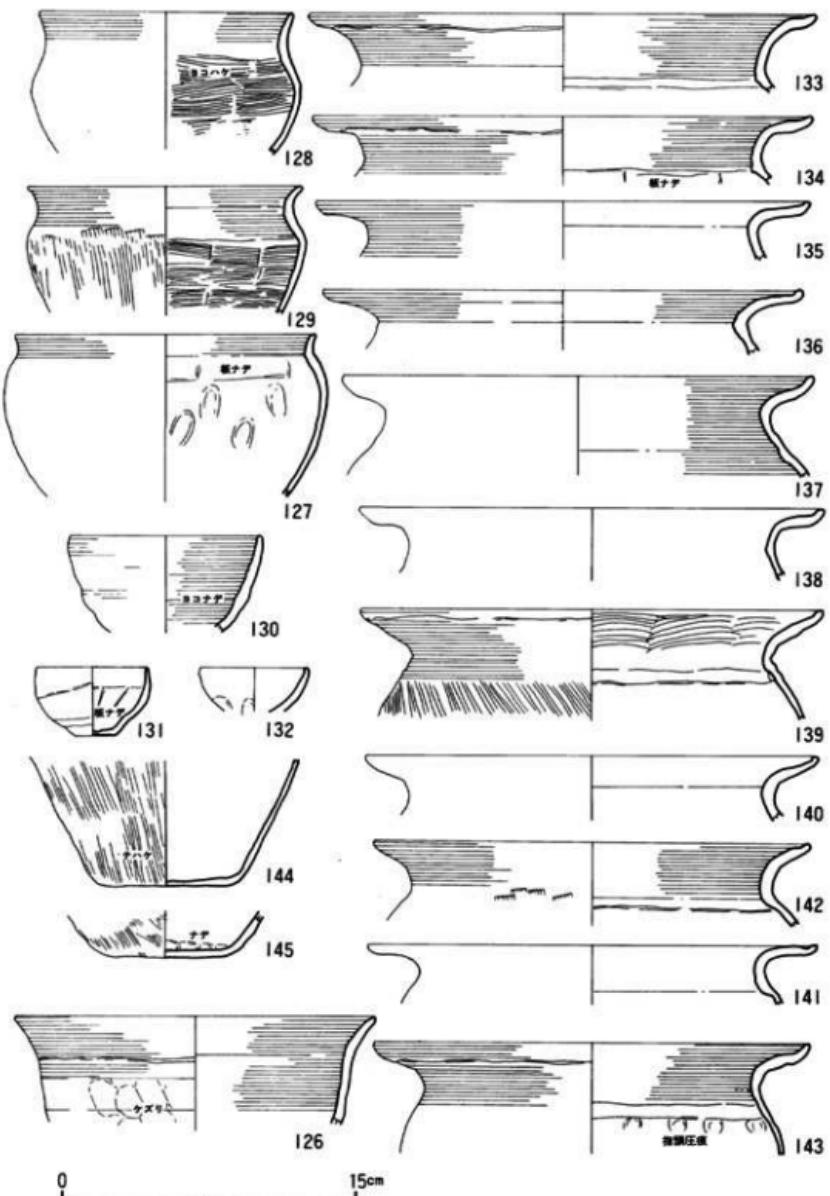
D 一口径14cmである。口縁部が内湾し、口唇部に平坦面を作るものである。123がこの型式である。

124・125は环蓋で、全面丹塗りされている。124は扁平な宝珠形つまみを有する。126～129は鉢である。鉢は口縁部の形態によって环に近い形で口縁部を大きく開き外反させるもの(126)と變形に近い形で、直線的に外反するもの(127～129)がある。130は半球形をなす碗である。131・132は碗形の手捏である。口径5.0cm、高さ3.5cmで器厚の薄い作りである。133～145は壺である。133～143は口縁の破片である。口縁部は「く」の字状に大きく屈曲させ、口唇部を肥厚させ受口状にする。また頸部に明瞭な接合痕を残している。口縁部にはヨコナデ調整が見られ、139～142はハケメ調整が施されている。134の内面に板ナデ調整が認められる。

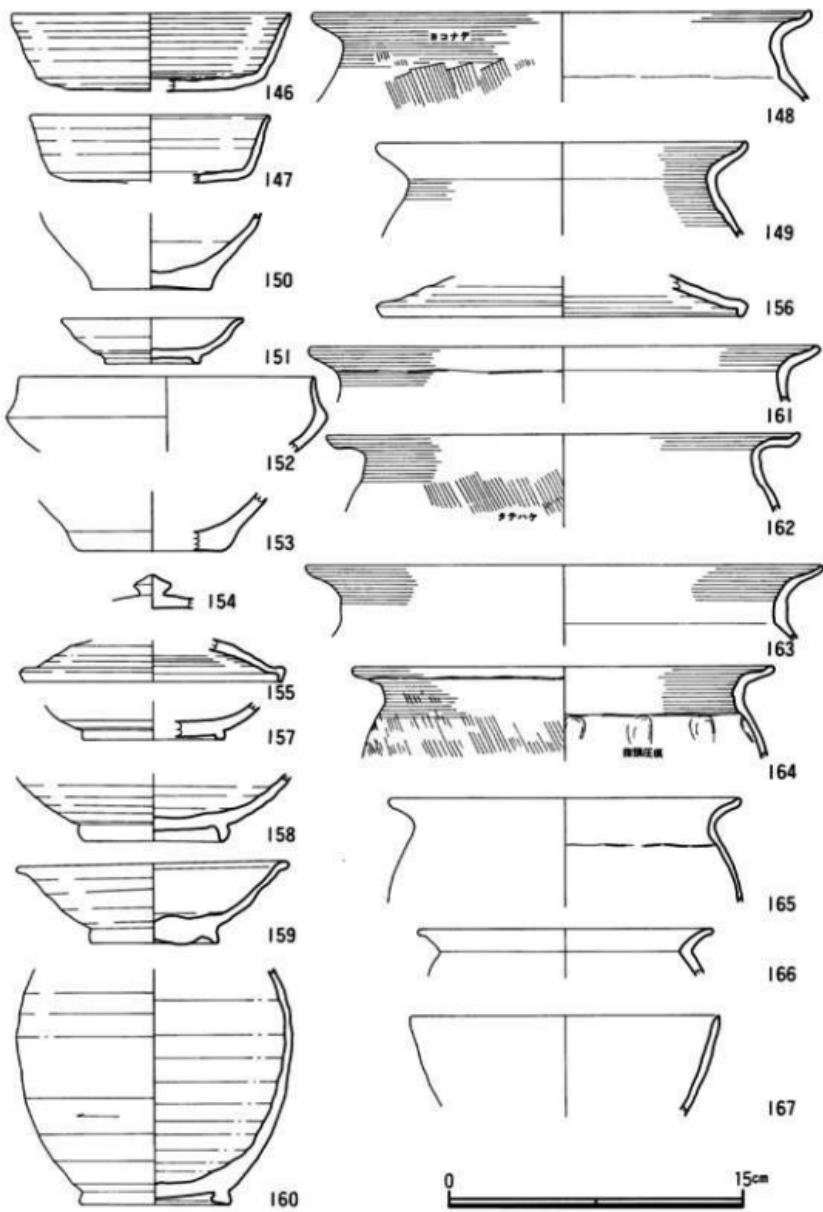
SB-02 (146～151) 146・147は須恵器の环身である。土器溜环身 II e と類似する。150



第13図 B地区出土遺物3



第14図 B地区出土遺物 4



第15図 B地区出土遺物 5

は土師器の壺の底部である。151は瀬戸焼きの皿である。口径9.4cm、器高2.3cmである。全面に黄褐色の釉がかかり見込に印花が認められる。

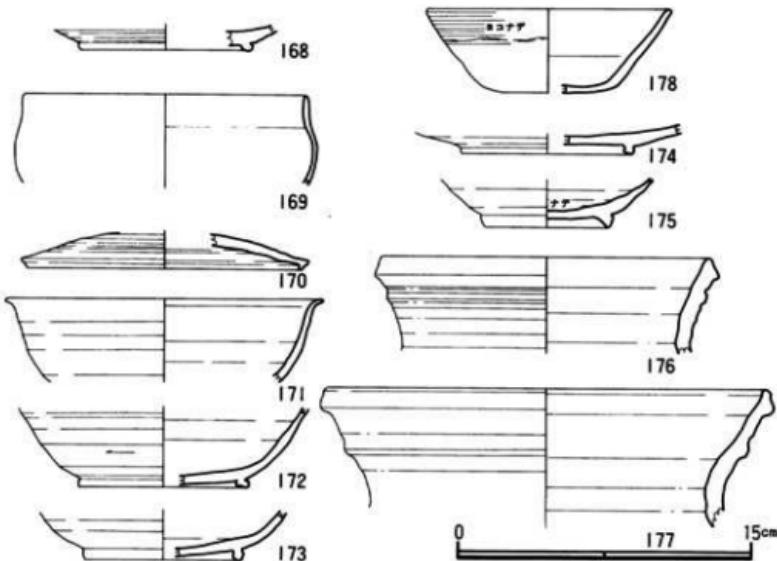
S B-02内の土器は、151以外は奈良時代のものと思われる。

SK-02(152~153) 全て土師器である。152は壺身で須恵器を模倣したものである。153は壺の底部である。いずれも6世紀の製品である。

SD-01(154~167) 154~156は須恵器の壺蓋である。154は中央が高い宝珠形つまみを有する。155・156は口縁部を内側に折り曲げるもので、いずれも土器溜IIb類に属する。157~159は灰釉陶器の碗である。157は底部がヘラケズリ調整され平らである。高台は方形を呈す。158は爪形高台を有する底部である。159は口径12.4cm、器高4.1cmで薄手の作りである。底部には焼きブクが見られる。160は壺の破片で、体部が梢円形をなし、ノタ目を顯著に残すものである。161~166は壺の口縁部である。口縁部は「く」の字状に大きく屈曲するものである。これらの口縁部の作りは、ゆるやかに折り曲げ、その先端をわずかに引き上げるもの(161~165)水平になるほどに折り曲げるもの(162~164)、鋭く折り曲げるもの(166)などの違いが認められる。

167は鉢である。土器の年代観については須恵器と土師器は奈良時代と考えられる。灰釉陶器と160の壺は9世紀~10世紀にかけてのものであろう。

その他(168~177) 168は灰釉陶器の底部で高台は小さく方形である。9世紀の製品であろ



第16図 B地区出土遺物 6

う。169は土師器の鉢で、口縁部が直立するものである。奈良時代と思われる。168・169は小穴内より出土したものである。170～178はA地区内覆土より出土したものである。170は須恵器の壺蓋である。つまみは欠損しているが、口縁部を内側に折り返しており土器溜IIb類に属するものである。171～175は灰釉陶器の碗である。171～174は薄手の作りで形態の特徴より黒窯14号窯式に平行するものである。

175は爪形高台を呈する底部で折戸53号窯式であろう。176・177は須恵器の甕である。176は口径16.7cm、177が22.5cmとやや大型である。甕は口縁部がゆるやかに外反させ、口唇部を断面三角形状に平坦面を作るものである。178は土師器の壺である。口縁部は外側に開いている。以上これらの土器は、奈良時代～平安時代のものである。

ま　と　め

今回の調査でA地区より古墳時代の土師器が多く出土した。土師器は、壺・甕・高壺・鉢・瓶等の器種があるが、これらはSB-01・SK-01内で出土した以外は遺構に伴うものはない。またSB-01内では一部の器種が欠け各器種ごとの年代を検討するには充分でない。よってここで壺類を中心に年代類について考えてみよう。

A地区出土の壺について整理すると形態の違いによって4類に分類される。

壺A—口縁部を内湾させるもの

壺B—口縁部が直立するもの

壺C—口縁部が外側に開くもの

壺D—口縁部と体部の境に稜線を明瞭に残し、口縁部が直立するもの。一般的に模倣壺と呼ばれるものである。

これらの土器を出土している良好な遺跡として焼津市道場田・小川城遺跡（1987年）、宮之腰遺跡、宮下遺跡、袋井市坂尻遺跡（1983年）がある。まず良好な一括資料を基に整理した山口和夫氏の土器分類（1987年）に対比させてみることにする。壺A=壺Aa 1、壺B=壺Aa 2、壺C=壺Aa 3、壺D=壺Dbと考えられる。一括資料の遺構として、小川城遺跡CK18・SX-02、宮之腰遺跡MCS・SX-01、道下遺跡MHK・SX-01を示してこれらが以下の順で年代差を示すとした。壺はCK18・SX-02では壺Aが主流を占め、次のMCS・SX-01では壺B・Cが加わり壺A類が減少する傾向がみられる。MHK・SX-01では壺Dが出現する。以上のことから壺A→壺B・C→壺Dとなるが、壺Aから壺Dに器種が単純に変化するのではない。各遺構の出土状況から壺A→壺Cまでは系譜的に追えるものであり、壺Dは別系譜の器種と考えられる。

A地区的出土土器を壺に限定して対比するとMHK・SK-01に平行するであろう。しかし、高壺の一部にMCS・SX-01に近い型が存在する。また、この時期の土器では西の袋井市坂尻遺跡SD-19に類似がみられる。これは、MHK・SX-04に近い形態のものであり、両遺跡は土師器にMT15形式の須恵器が共存している。以上のことからA地区的土師器はMCS-

・ S X—01、坂尻遺跡 S D—19に平行するものと考えたい。編年的には壺Dの出現する時期であり、須恵器の編年より6世紀前葉であろう。

B地区では、土器溜め出土土器を壺類との器種より年代について考えてみよう。ただし55の6世紀後半と考えられる壺蓋I類は、これだけ他のものより古く混入と考えられることから除外する。

壺類は須恵器の器種でも一系列の変化を系譜的に追うことができるため編年が進んでいる。土器溜壺類は、壺蓋5型式、壺身5型式に細分された。壺蓋IIaと壺身I、壺蓋IIbと壺身IIb、壺蓋IIcと壺身IIc、壺蓋IIdと壺身IId、壺蓋IIeと壺身IIeが基本的にセットをなすと思われる。これらの土器を城山遺跡出土遺物と対比してみると、壺身Iは皿類B種、壺身IIaはIV類a種、壺身IIbはV類a種、壺身IIcはIV類b種である。城山遺跡編年によると、壺身III類a種・b種、V類a種は第3群土器で8世紀前葉から中葉である。壺身IV類b種は第5群土器で8世紀末～9世紀前葉である。以上をまとめると豆尻遺跡の壺身I・IIa・IIbは8世紀前葉から中葉、壺身IIc～IIeは8世紀末～9世紀前葉となる。近年この時期の良好な資料が下滝遺跡（1985年）から出土しているが、それによると壺身Iは8世紀前葉、壺身IIbが8世紀後半前葉に位置づけられている。また壺身IIc・IId・IIeは8世紀後葉～9世紀初頭と考えられ、城山遺跡の編年観に若干の修正が行っている。ここでは下滝遺跡の編年に従うことにしてみたい。

土器溜め出土土器を整理すると、6世紀後葉・8世紀前葉・8世紀後半前葉・8世紀後半後葉～9世紀初頭の4時期に分けられるが、壺類以外の器種は8世紀後半のものと考えられる。

おわりに

A地区とB地区の両地区で住居跡2ヶ所、土壤2ヶ所、溝3ヶ所を検出した。各遺構の年代については出土遺物が少なく時代を決定するに難しいものもあるが以下のように考えている。S B—01・S K—01は6世紀前葉、S B—02は8世紀後半、S K—02は17世紀、S D—01は10世紀前半である。S D—02・03は出土遺物がないために不明である。

両地区的出土遺物からA地区は古墳時代の生活跡であり、B地区は奈良時代から平安時代の生活跡であることが判断される。両地区は川を隔て数十メートルの距離しかないが、遺跡の性格に違いが認められたことは今回の調査の大きな成果であった。また今後この地域の遺跡の性格を考える上で重要な資料となろう。加えて西方川の流路の研究を進めることができ、白岩遺跡をはじめこの地域の遺跡の性格を考える上で重要なことであろう。

最後に出土遺物の中で平安時代初頭の灰釉陶器が多く出土している点は注目される。今後この時期の研究が進めば、この地域に政治的に強い性格を示す遺跡が発見されるのではないかと推測される。

おわりに、本文をまとめるにあたり、向坂綱二氏をはじめ川江秀孝・鈴木敏則・賛元洋・島田冬史の各氏に多くの御教示をいただいた。末筆ではあるが厚くお礼申し上げたい。

ここで紹介する遺物は、加藤賢二氏によって豆尻遺跡周辺で表面採集されたものである。遺物は縄文土器 7 点、石器 2 点の合計 9 点である。

土 器 1 は口縁部から底部にむかって朝顔形に開く器形をとると考えられる。文様は口縁下に 1 条の沈線をめぐらし、以下沈線で胴部に区画文を形作り、その区画の内部には沈線による蛇行懸垂文がみられる。地文は単節 L R 原体を横位に施文し、縄文押捺後に各沈線が描かれている。

2 はややキャリバー気味に口縁部がふくらむ深鉢形土器である。口縁直下に 2 条の沈線をめぐらし、その下に沈線による梢円区画文が見られる。単節 R L 原体を横位に施文した後、沈線を描いている。

3 は東海地方に特徴的に見られるキャリバー形の深鉢であろう。単節 L R 原体を横位に施文し、その後に 3 条の沈線をめぐらしている。

4 は無節 L R の燃糸文を押捺している。施文方位は一定していない。器厚は約 5 mm と薄手だが焼成は良好である。

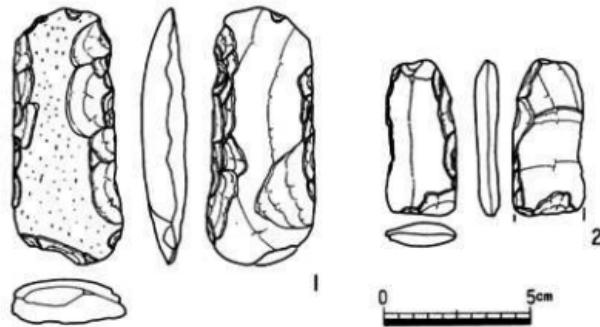
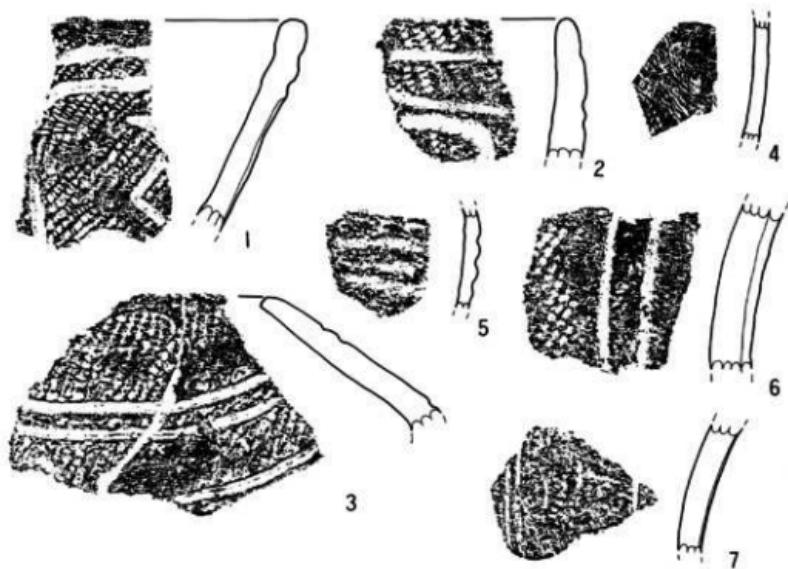
5 は口縁に近い部分の破片と思われややふくらみを持っている。横位の沈線がみられ、薄手で焼成は余り良くない。

6 は朝顔型に開く深鉢の胴部である。縦に垂下する隆帯をつけ、地文に単節 L R 原体の縦位施文が見られる。内面はよく研磨されてきて研磨痕が観察される。

7 も 6 と似た器形と推定できる。縦位に何条かの沈線をつけており、単節 L R 原体の縄文が横位に施文されている。

4 と 5 を除いては胎土・焼成は皆似ており、緻密な生地の中に若干の白い砂粒が混入されている。土器はいずれもローリングをうけていて、水成の堆積がなされたことが推定される。各土器の編年的位置について考えてみると、2・7 は加曾利 E III 式、3・4 は東海系の土器、それ意外については曾利系とみられる。3 のキャリバー形の器形は中富式に見られ、中富 IV 式もしくは V 式であり、4 も燃糸地文からみて中富式にあたると思われる。曾利系の各土器でかるが、1 は器形や口縁部文様帶の消失。胴部の区画文といった諸点が曾利 IV 式の要素を満たしており、5・6 についても確実な型式判断はできないが、曾利 III 式から IV 式あたりに相当しよう。この 6 の土器についても地文が縄文である点が注意される。曾利 III 式から IV 式は地文が条線であることが圧倒的に多く、縄文施文が見られる場合には器形、文様構成等が加曾利 E 式の模倣である事が多いのに対して、今回提示した資料は様相的には曾利的であるが縄文施文がなされている。さきに述べたように、曾利 IV 式そのものの文様構成をとる 1 の土器が縄文施文を行っている点などをみても、本地域における縄文中期後葉土器のあり方の複雑さがうかがえよう。今後の該期の資料の増加が期待される。

石 器 1 は打製石斧である。長さ 17.7 cm、幅 7.4 cm、厚さ 3.0 cm である。刃部の一部を欠いており、片面には自然面が残っている。側縁と刃部の一部には摩滅があるが、自然面の残り



第17図 豆尻遺跡表採遺物実測図

具合から考えて、あまり使用されなかったものと考えられる。石材は流紋岩と考えられるがはっきりしない。

2も打製石斧である。長さ10.9cm、幅4.9cm、厚さ1.7cmである。刃部は大きく欠損しており、板状に剥離している。全体にやや摩滅が進んでおり、使用痕等ははっきりしない。石材は緑泥片岩と考えられる。以上2点の石器の帰属時期は土器と同様縄文時代中期後葉であろうと思われる。

豆尻遺跡周辺では、縄文時代の遺跡が今までのところ確認されておらず、採集された遺物はこの周辺の遺跡分布等を考えるにあたって貴重な資料と言えよう。

参考文献

| | | |
|-------------|------|---------------|
| 菊川町教育委員会 | 1982 | 菊川町遺跡地図 |
| " | 1986 | 豆尻遺跡 |
| 袋井市教育委員会 | 1983 | 坂尻遺跡第3次調査 |
| 浜松市遺跡調査会 | 1985 | 下流遺跡 |
| 浜名郡可美村教育委員会 | 1981 | 城山遺跡 |
| 焼津市教育委員会 | 1987 | 焼津市歴史民俗資料館年報Ⅰ |

豆尻Ⅱ遺跡発掘調査報告書

1988年3月30日発行

編集 静岡県菊川町教育委員会

発行 静岡県袋井土木事務所

静岡県菊川町教育委員会

印刷 株式会社開明堂

写 真 図 版

図版第1



表土剥き作業



発掘作業状況

図版第2



A地区完掘（東より）



B地区完掘（南より）

図版第3



S B - 01遺物出土状態（南より）



S B - 01完掘（南より）

図版第4



SB-01内出土土器



SB-01内出土土器

図版第5



S K - 01遺物出土状態（南より）



S K - 01完掘（南より）

図版第6

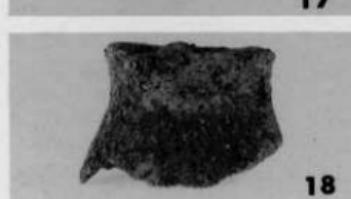
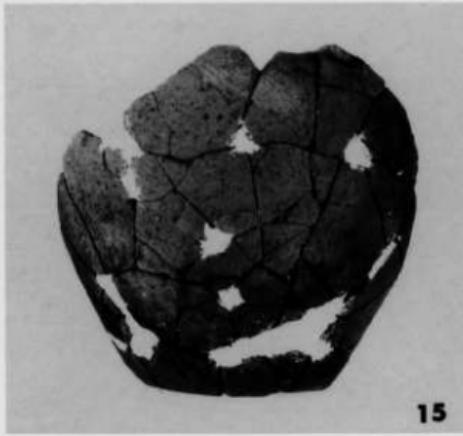
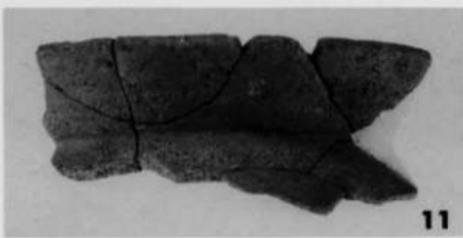
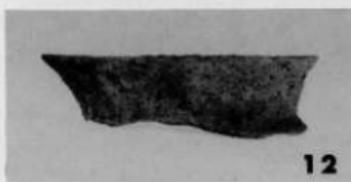


S B - 02 完掘 (西より)

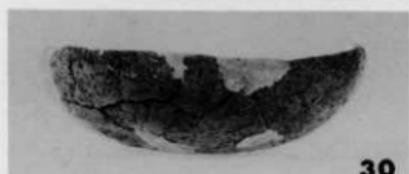
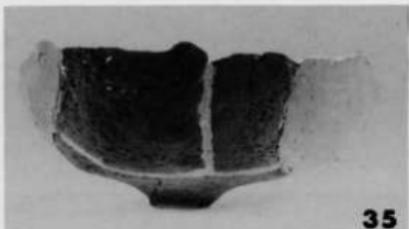


S D - 01 完掘 (西より)

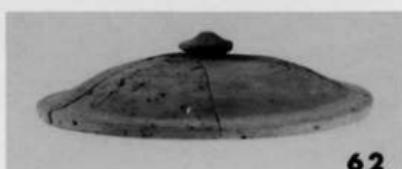
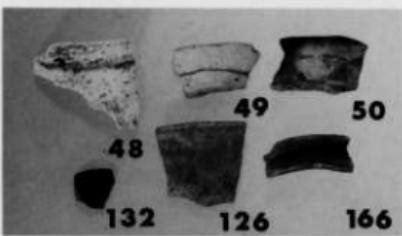
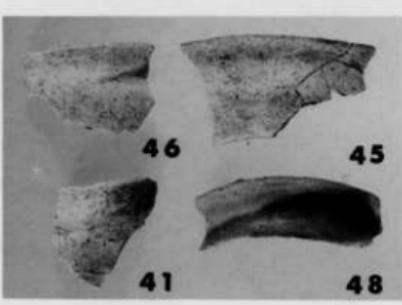
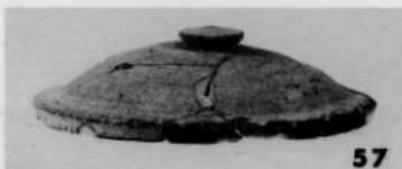
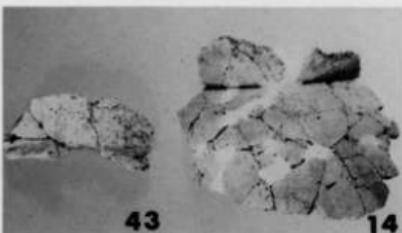
図版第7



図版第8



図版第9



図版第10



63



70



64



71



65



72



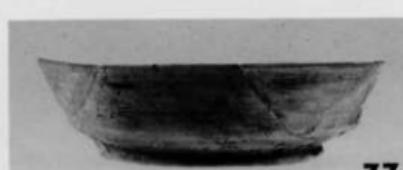
66



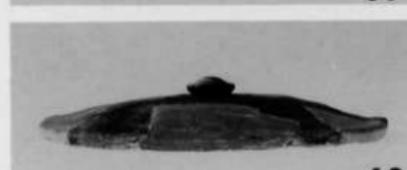
73



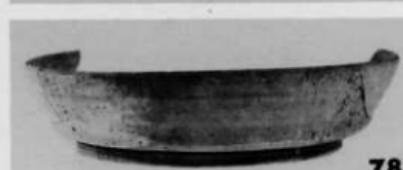
67



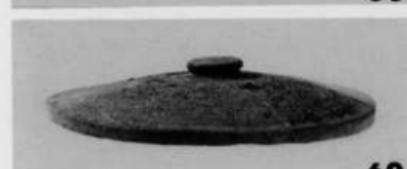
77



68



78

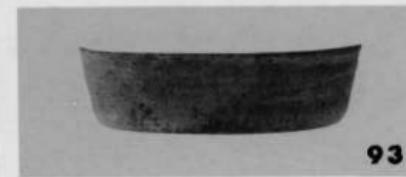
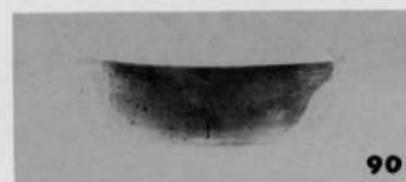
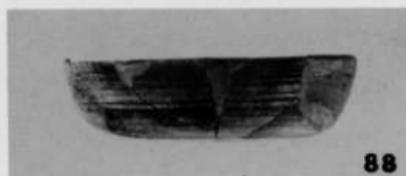
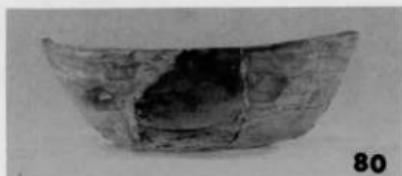


69

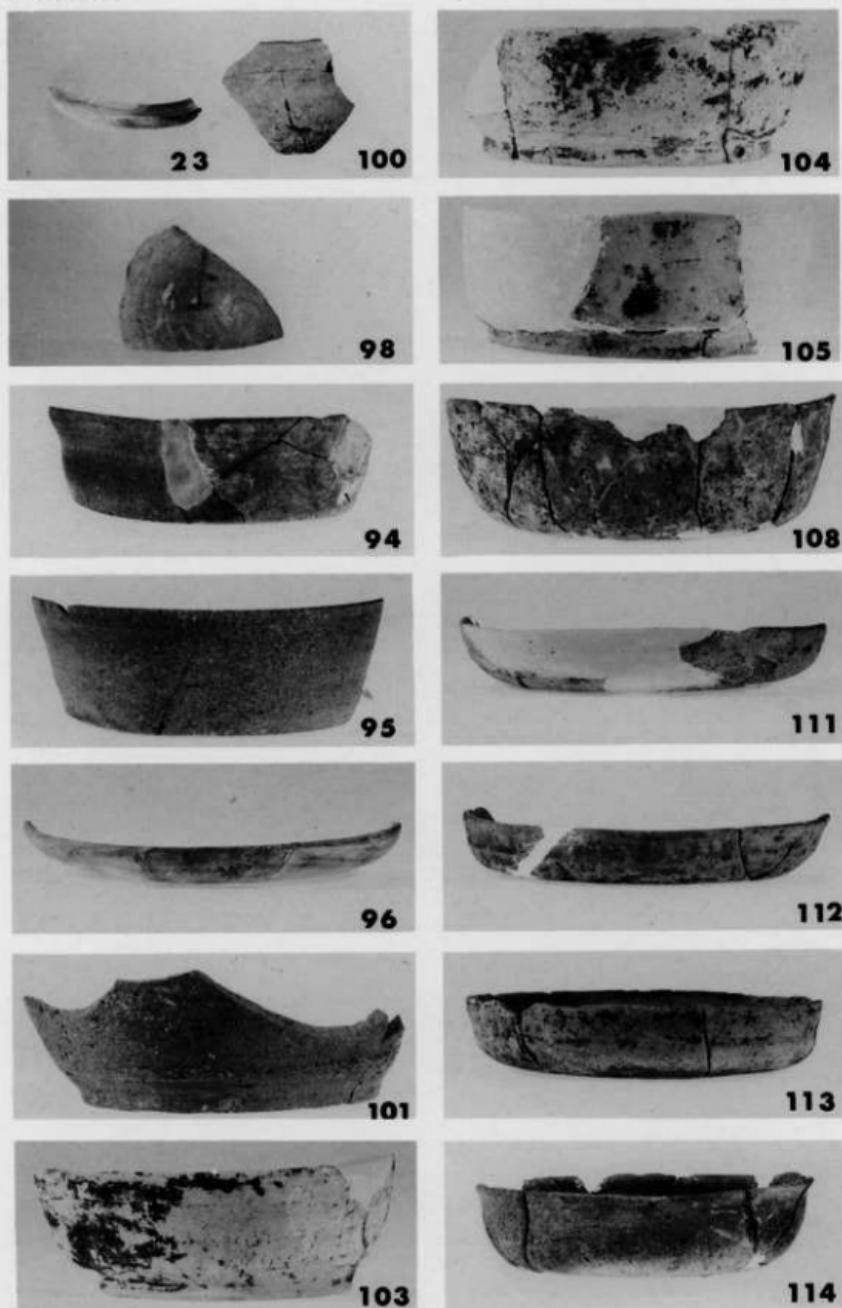


75

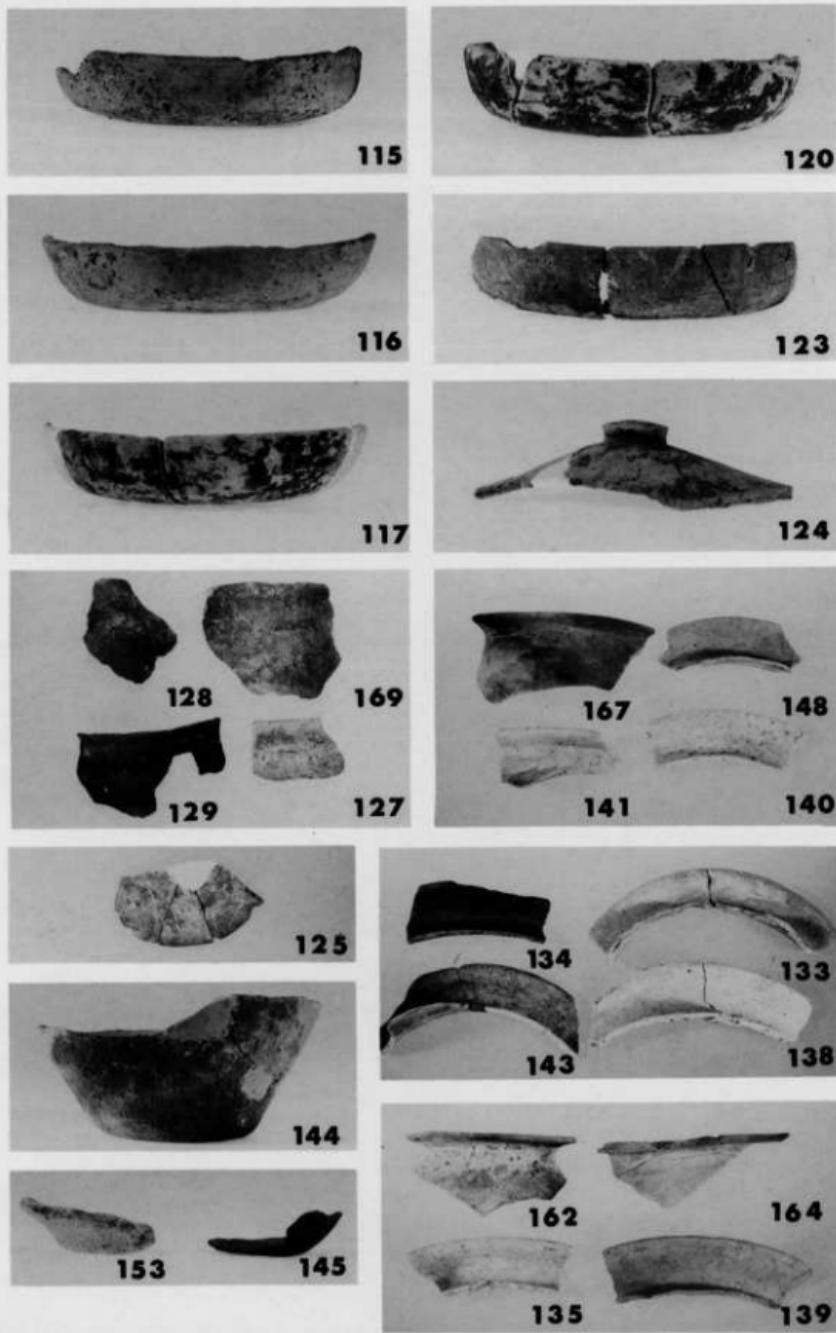
図版第11



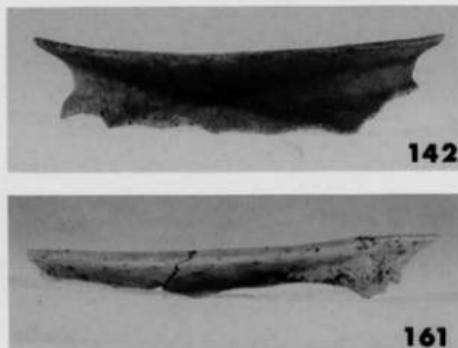
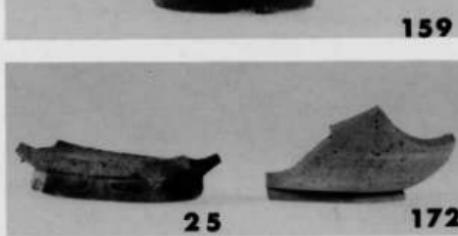
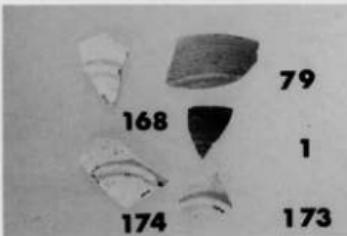
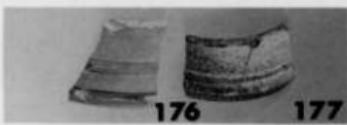
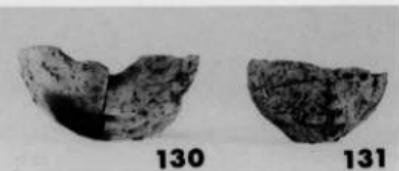
図版第12



図版第13



図版第14



図版第15

